

私

の妹は、療育手帳を持つ知的障がい者である。一歳半に高熱を出し、髄膜炎に罹った脳への後遺症であるらしい。妹の障がいを簡単に言えば、知能は二歳、身体は三十八歳で介助が必要な大人である。このアンバランスさが妹にとつての障害であり、社会における生きづらさなのだろうと思う。

私は決して優しい、いい姉ではない。お互いに幼かった頃は一緒に遊んだり、出かけたが、私が周囲の視線を気にして、妹と一緒に歩くことを避けた時期もある。妹の事は隠したわけでもないが、誰かにわざわざ話さなくてもよいことであつた。いちばん近くにいる向き合いたい家族なのに、距離を置いていた自分がある。いつも真っ直ぐに一生懸命に生きている。そんな妹「ゆかちゃん」を母は「天使みたいな子だよ」と言う。

やがて私は結婚して、妹と離れて暮らすようになった。新しい家族もできた。もうすぐ四歳になる息子は、自分のことを「チィ」と言うので私もそう呼んでいる。息子が産まれる時、妹は母と一緒に病院の分娩室に来た。母が居るところには必ず妹がいる。痛みが苦しむ私のそばで、妹はわけのわからないことを言っていたが、それが彼女なりの私への応援だったのかもしれない。我が子が生ま

ていた。上手く換えられない。息子は泣く。ずいぶん手間はかかったが、こうした二人のやりとりを何度も重ね、大切に見守り続けた。いつも息子は、ゆかちゃんをじーっと見ていた。妹がお風呂で介助される姿も『大人なのに、なぜ一人で出来ないのだろう?』と言っているかのようになり、じーっと、じーっと見ている。息子が三歳になり、言葉を話し始めた頃のある日、「新幹線に乗りたいね。」と話をしていたら、「チィは誰と行くの?」と尋ねると、「チィはね、トントンとタンタンとばあばんと、ゆかちゃん。」

「ゆかちゃん」息子が初めて妹の名前を口にした瞬間だつた。息子は「ゆかちゃん」の存在を避けて受け容れている!彼の発達段階でゆっくりと時間をかけて「ゆかちゃん」の存在を受け容れたことが私は嬉しかった。「ゆかちゃんね、ゆっくり歩くからね、チィもゆっくり歩くの。」と息子は続けて言った。

これは、障がいに対する同情ではない。三歳の息子が障がいを理解し、障がいのある妹に寄り添う言葉が自然に発せられたのだと思つた。息子に人への優しさが育っていることもまた、嬉しかった。四歳を前にした今では、息子が言う。「ゆかちゃん、お茶はちよつとずつ飲んでよ。(水筒のお茶を) ぜんぶ飲んだらいい

住人十色

～共に生きる～

障がいのある人もない人も、個性は十人十色。

心の壁のない、

誰もが共に生き、活躍できる町へ。

特集の最後に

平成27年度「心の輪を広げる体験作文」で

最優秀賞を受賞した

鳥取県の川村恵子さん(42)の作品

「ゆかちゃんとチィ」を原文のまま紹介します。



2月21日(日)に藤久保公民館で開催した「ふれあいコンサート」の参加者と来場者。音楽活動をしている障がい者団体を主体に、日々の練習の成果を発表。手を挙げてひらひらさせるのは手話で拍手の意味。

んで。」と。いつも自分が言われているのに、妹のことを気にかけて、接する姿はお兄さんみたいだ。そうか。ゆかちゃんの内側は二歳のままならば、チィはもうゆかちゃんより年上のお兄さんになったんだね。

「障がいのある人とのふれあい」それは特別に何かをしなくても、日常の中にあつた。褒めると、にこっと笑う。怒ると「もうやめて。」と言うかのように見つめられた。ぎゅっと抱きつかれたときは、「怖い思いをしたのだろう。」とハツとして気付く。日常の暮らしにはそうした一瞬がある。そうした瞬間的な心の重なりを「ふれあい」と呼ぶのかもしれない

い。些細なしぐさや視線、表情を見逃さずに受け止められる自分でいたい。一瞬の「ふれあい」は弱いかもしれないが、積み重ねていけば、もつと強い絆になるだろう。

鳥取県が取り組む「あいサポーター運動」は、障がいの特性を理解することから始まり、障がいのある人とな人が共に生きる社会をつくるための取り組みである。決して「してあげる」という押し付けではない。私は、息子の姿から障がい、そして障がいのある人をありのままに受け容れる姿勢とその過程を学んだ。障がいを理解させるために、言葉の説明なんて要らなかった。まだ言葉も発しない幼

「れ、ふと思つたことがある。私は妹の障がいをこの子に何と伝えればよいのだろうか。息子にとつて叔母にあたるゆかちゃんを息子は『何かちよつと普通と違う、へんな人だ。』と思う時が来るのだろうか。その時、私は息子に何と尋ねようか。これまで妹と知らず知らずのうちに距離があつた私は、妹ともつと近くで関わりたいと思つた。息子の誕生と同時に、妹がいる家の隣に住み、物理的な距離はもろろん、心の距離を縮めたかつた。関わりと言つても、妹と一歳にもならない息子と私が、ただ毎日と一緒に暮らすだけ。手のかかる子どもが二人いるみたいだつた。息子をベビーカーに乗せ、ゆかちゃんはその横でベビーカーにつかまってポチポチとゆっくり歩く。妹と並んで歩くのも久しぶりだつた。

息子が六か月を過ぎた頃から、自分にひとつも声をかけない妹を息子は不思議そうに見ていた。妹が近付くと怖がり、私の後ろに隠れたこともあつた。人見知りにしては長い。妹を見ると「怖い」と言うようにもなつた。私は「怖くないよ。ゆかちゃんは優しいよ。」と繰り返して息子に言った。それからもずっと妹と息子と私は一緒に過ごした。妹の新たな一面も見られるようになった。息子が泣けば、妹はおむつを持ってきて、換えようとしていく気がした。

これから先に息子が成長していく途中で、妹への見方が変わったり、妹と接する距離が変わることがあるかもしれない。その時が来れば、息子はもう覚えていないかもしれないが、ゆかちゃんとチィが互いに優しく接していた日々のこと、息子が初めて「ゆかちゃん」と言った時のやりとりをしっかりと息子に伝えようと思う。そして、母が私に言ったように、私も「ゆかちゃんは、天使みたいな大人だよ。」と言うのかもしれない。

障がいを知り共に生きる あいサポーター研修

私たちが障がい者に対してできることは何かを考え、理解を深める「あいサポーター研修」を実施します。1時間半の簡単な研修です。障がいとは何か。この機会と一緒に考えてみませんか。

日時 3月6日(日) 13:30～15:30

会場 藤久保公民館

問 福祉課障がい者支援担当 内線176

